

第6回 日本ジビエサミット in 東京

『国産ジビエの最前線 広がるジビエ流通』

2019年11月20日(水)～22日(金) @ 東京ビッグサイト

【電車でご来場の方】●りんかい線 国際展示場駅下車 徒歩7分 ●ゆりかもめ 東京ビッグサイト駅下車 徒歩3分

【空港からご来場の方】●成田空港から(リムジンバス)約60分乗車 東京ベイ有明ワシントンホテル下車 徒歩3分 ●羽田空港から(リムジンバス/京急バス)約25分乗車 東京ビッグサイト下車

参加費
大会資料代
無料

お台場の山って、
逆さまなんだね。

TOKYO BIG SIGHT

©Tokyo Big Sight Inc.

講演要旨集

主催：一般社団法人 日本ジビエ振興協会

協賛：農林水産省、一般社団法人 全国農業協同組合中央会

後援：内閣府、厚生労働省、環境省、観光庁、東京都、一般社団法人 日本フードサービス協会、一般社団法人 大日本猟友会

※本事業は農林水産省令和元年度鳥獣被害対策基盤支援事業(鳥獣利活用推進支援事業)として開催するものです。



へい死動物の衛生的処理について ～コンポスト化を中心に～

(株)フロンティアインターナショナル

押田明則・大貫伸之介・小林邦郷・渡邊典夫

(おしだ あきのり・おおぬき しんのすけ・こばやし くにざと・わたなべ のりお)

全国における鳥獣による農作物への被害は年間 200 億円前後で推移し、近年は漸減の傾向にある。2016 年度末の、本州以南のニホンジカの推定個体数は中央値約 272 万頭、イノシシの推定個体数は中央値約 89 万頭となり、引き続き減少傾向であることが明らかとなった。国は 2023 年度までに鳥獣の数を半減させる目標を掲げている。

鳥害獣被害により営農意欲の減退、耕作放棄や離農、さらには森林の下層植生の消失、住宅街への侵入などの問題に及び、これらの対策は急務と言える。現在、害獣の捕獲頭数はイノシシが約 55 万頭、シカが 62 万頭で、そのうち 7.0%ほどしか食用利用されていない。つまり、捕獲鳥獣は利用がなされずそのまま廃棄されているのは全体の 90%以上となっている。現状では各地域の食習慣や流通などの問題から、食用の普及率があまり高くない状況となっている。

このようなことから、捕獲した害獣は埋設や焼却などにより廃棄処分されている。しかしながら、埋設の場合には埋設地の選択、穴掘りの重労働、さらには埋設後の害獣(キツネやタヌキ、あるいはイノシシ)による掘り起しや腐敗臭の発生、山の景観への影響などが問題となっている。

さらに、最近ホットイシューとして取り上げられる豚コレラがイノシシにも仮に感染していたとすれば、埋設処理を行う場合、埋設場所の汚染が危惧され、先に述べた掘り起しによって、二次感染する可能性も考えられる。また焼却処理する場合には、大気汚染の原因にもなりうる。

■へい死体の処理

宮崎大学の末吉先生は「イノシシの処理、山中でのと体処置、中抜き処置が適切でないと豚コレラはジワジワと拡大します。山深く、急斜面からのと体の運び出しは、困難です。高額な手当金を出すなど、妙案が求められます。野生イノシシに豚コレラウイルスが感染した場合、捕獲した場所からごみ焼却施設まで持って行く間で血などが垂れて、汚染を広げてしまわないか、あるいは家庭ごみの収集車が何台も出入りする焼却施設に感染イノシシを持ち込むことで交差汚染して更に周囲にウイルスを拡散してしまう危険性はないか」などの心配・指摘をしている。

豚でも同じであるが、へい死獣の処理は埋却、焼却、発酵(堆肥化)処理が考えられる。それぞれを簡単に説明する。

■埋却処理

埋却処理は中山間地では重機作業が行なえず、手作業での埋設となるケースが多くなる。埋設作業は、他の野生動物に掘り返さることを防ぐため、スコップで 2m 以上掘ることとなるが、作業に



写真1 埋却処理の様子(左:伊藤原図(豚)／右:韓国での口蹄疫発生時の埋却現場の上空を旋回するオオワシ)

1時間以上も掛かることもある。「浅く埋めると他の動物に掘り返されて腐敗臭がひどく、山の景観も損なう。処理作業は大変で体力的に限界」と作業を行なう方は実感している(写真1)

■焼却処理

ほぼ完全な方法とされるが、化石燃料の高騰、二酸化炭素の排出などの問題を考えると厳しいものがある。都市ゴミでは着火時に多少の燃料が必要であるが、ゴミ自体の燃焼エネルギー(家庭ゴミで、数百~3,000 kcal 程度)で自燃可能なので、コストカットは達成可能と思われます。しかし、へい死獣(水分が80%以上)の処理はコストの心配が残る(写真2)。



写真2 と体焼却処理施設
(和歌山県古座川町の例)

■堆肥化

最近では減容化という名前と呼ばれているが、微生物(好気性高温菌)の働きによる発酵処理によるものである。スクリューの付いた密閉式の発酵槽にイノシシなどを丸ごと入れ、水を含んだオガクズと混合すると、内容物は次第に品温を上昇させ、病原微生物が生存不可能となる温度域の60°C以上の状態を長時間に亘って保ち、高温微生物を増殖させ、分解処理を行うことが可能となる。



写真3 発酵処理施設(左:宮城県村田町の例)
ドラム型堆肥促進機(右:「バイオベータ」)

方法によっては1基あたり一度にイノシシ8頭を投入でき、肉は約5日、骨でも1ヶ月で分解が可能となる(写真3)。

この処理は理論的に、家畜ふん尿の堆肥化処理と同じような処理と言える。高温処理することによって、内容物中の病原菌や病原ウイルスは殺滅され、寄生虫やその虫卵も併せて殺滅可能となる。

へい死体の処理は、病気が発生した場合は必要不可欠の作業である。発生の現場からウイルスなどを拡散させないような努力は可能である。例えば、①現場から遠くに斃死体を運ばない。②被覆したシート類を再利用しない。③死亡を確認したら、迅速に処理を行なう・・・などが考えられる。

ドラム型堆肥促進機「バイオベータ」のサイズとその処理能力

	サイズ L×W×H(cm)	内部材質	空・満重量(kg)	1日平均処理能力/週(kg)
BIO442SS	1281×127×152.4	SUS304 ステンレス鋼	4491・11343	225
BIO430SS	1005.8×127×152.4	SUS304 ステンレス鋼	3448・8439	160
BIO418SS	670.6×127×152.4	SUS304 ステンレス鋼	2631・6034	80
BIO316	563.9×96.5×121.9	SUS304 亜鉛メッキ軟鋼、ステンレス鋼	1725・3993	55
BIO308	320×96.5×121.9	SUS304 亜鉛メッキ軟鋼、ステンレス鋼	907・2014	27